

Katherine Anne Porter :

逃 避 へ の 情 熱

木 村 淳 子

作品の素材を、直接的にまた間接的に自己の体験に負っているというキャサリン・アン・ポーターは、第一の作品集 *The Flowering Judas and Other Stories* によって、いわば現在の体験にかかわる作品、マーク・ショアラ一流のいい方をかりれば “What are we?”⁽¹⁾ を問う作品を世に送り、第二、第三の作品集、*The Leaning Tower and Other Stories* と、*Pale Horse Pale Rider* においては、直接自身の過去をふり返って、“What were we?”⁽²⁾ と問いかける。いわゆる “The Miranda Stories” (ミランダ物) として知られる、少女ミランダを主人公とする一群の作品であるが、この中に数えられるのは、*The Leaning Tower and Other Stories* に収められている、“Old Order” 中の7つの小篇と、“Old Mortality”, “Pale Horse, Pale Rider” ー共に *Pale Horse, Pale Rider* に収録されているーである。少女ミランダは、ウィリアム・L・ナンスの “thinly fictionalized autobiography”⁽³⁾ という言葉をまつまでもなく、過去のポーター自身を写した人物であり、ミランダの体験と、作者自身の体験との差はほとんどないとみて差しつかえがない。

“Noon Wine: The Sources”⁽⁴⁾ の中で、ポーターは、1920年代のメキシコ、1930年代のヨーロッパ、とりわけドイツでの生活を含む、異郷の生活を振り返って、次のように述べている。

「私は、全くくつろいだ気分を味わうことはありませんでした。私の故郷がどこにあるのかは、わかっていました。そこで、この間じゅう、私

12 Katherine Anne Porter : 逃避への情熱

は私自身の故郷、私の南部についての物語の、ノートを作っていたのです。」

(I did not feel exactly at home; I knew where home was; And all the time, I was making notes on stories—stories of my own place, my South——.....)(⁵)

現在をよく認識し、さらに未来への正しい展望を得るために、過去を振り返り、過去を発掘しようとする努力は、どのような作家、あるいはどのような人間にとっても、ごく自然ななり行きである。キャサリン・アン・ポーター自身の過去への志向の中にもこうした意図は当然含まれていたことであろうし、長い異郷での生活における、己れの過去のすべてを包含する故郷への、憧れにも似た思慕の念を人間の抱くごく当然の感情と受けとめることもできる。が、特にポーターの回帰を独特のものとして、他の作家と区別するような動機がありはしなかったであろうか。いかなるパッションが彼女をして故郷を飛び立たせ、さらには回帰の衝動にかり立てたのであろうか。

“The Miranda Stories” が、thinly fictionalized であると同じほどに、インタビューに答えるポーター自身の過去の話は、時に fictitious である。ロバート・ペン・ウォレンによれば、作品の中で見せる顔と、その他の場、例えばインタビューや、手紙や、評論などの場で見せる顔とが一致するすばらしい資質を備えた作家である、ということになるし、また、ヘンドリックのように、一種の苛立ちともどかしさをもって、「彼女は、ホイットマンがしたように、自分の外観をとりつくろおうとしたのだ。神話を作り上げる彼女の才能には恐るべきものがある」(She has, as Whitman did, attempted to control her own public image. Her abilities as mythmaker are formidable)(⁶) という批評家も出てくるのである。インタビューに答えるポーターの名ストーリー・テラーぶりと、それ故に、彼女自身がわれ知らず指の間から

こぼしてしまう、事実内容の不一致、矛盾に気づくとき、これらの言葉は少なからず皮肉な響きと、苦々しさを帯びてくる。そして、彼女の内なるパッションの質と、そのパッションが彼女を駆り立てて行く方向とを示唆されるようにも感じるのである。すなわち、彼女を駆り立てて行ったのは積極的な、前進をうながすような態のものではなくて、どのように表れようとも、それは常に目の前に立ちはだかる障害からの逃避を志向してやまないパッションであったのではなかろうか、と考えられるのである。決して数多くはないポーターの作品を読み通してみても気がつくのは、作者ポーターの一貫した姿勢である。ナンスは次のように指摘する。

「彼女の小説に関して顕著な事実、その形式、主題の豊かな多様性ではなくて、この多様性の中にある一貫性である。」(The most remarkable fact about her fiction is not its rich variety of form and subject but the fundamental unity within this variety.)⁽⁷⁾

この一貫した態度は、“The Miranda Stories”によってさらに明らかにされるように思われる。即ち、ポーターが描いた現在と、今後を描き出す未来は、“The Miranda Stories”をかなめとして世に発表されるのであり、また一人の人間の発展は、その過去に根ざすものだからである。

“The Miranda Stories”は、主人公ミランダの成長の過程を、彼女の外界への目覚めを通して描きだす。『テンペスト』の女主人公を想起させるこの名前も、それ故にいわれのないものではないであろう。絶海の孤島に育ち、父プロスペロと、みにくい怪物キャリバン以外を知らないミランダが、魔法の眠りから覚めて、はじめて外の世界からの人間達を目のあたりにしたとき、彼女の口をついて出たのは、「このようにすばらしい人たちのいるこの世界は、何とすばらしいところなのでしょ

14 Katherine Anne Porter : 逃避への情熱

う。」という感嘆の叫びであった。恐ろしい試練のあと、真の悔悛に達した謀叛人達の姿は、地を這うキャリバンのみにくさとは対照的に、ミランダの目には美しいものと映じたのであった。

さて、ポーターの創り出したミランダの目覚めは、美しい夢の崩壊に始まるのであり、ミランダの成長の過程は、彼女を包んでいた幻想と神話の崩壊の過程なのである。それは同時に、ポーターのいわゆる「私の南部」の伝統と夢の崩壊でもあるのである。「祖母」(Grandmother)に代表される「南部の伝統」(Old Order)は、毎夏の農場行きの際に、思い出したように取り出され、荷物の中に他の入用の品々と一緒につめ込まれる、あの古い麦わら帽子のようなものである。時折り思い出されはするが、もはや日用の品ではない。かつてのミス・ソフィア・ジェインである祖母が農場に着いた時に沸き上る興奮は、彼女が衣ずれの音を立てながら、ニグロの使用人達の間を指図して歩きまわるときに一段と高まり、その姿は、彼らの蜂の巣のざわめきにも似た繰り言と、直訴の中で大きく見えるのではあるが、決して長つづきのするものではないのである。それはやがて、ただの穴にすぎぬ墓穴に葬られるものとなる。

幼ないミランダの外界に対する開眼は、はじめてのサーカス見物の際の恐怖の体験にはじまる。おそらくそれは彼女にとって、外なる世界への最初の遠出であり、家中の者たちの取りなしによって、「今度限りですよ」という祖母の言葉と共に許された、サーカス見物ではあったのだが、ミランダはけっして楽しむことができない。仮面のように顔を白く塗りつぶして、だぶだぶの服を着た道化。その顔の歪みは笑いなどではなくて、苦痛と驚きの表情であることをミランダは知る。空中に渡された綱の上を、あわや墜落しそうになりながら渡って行く綱渡り芸人。耳もとで破裂したかのように、突然大きな音をたてるブラスバンド。すべてがミランダに恐怖を与え怯えさせる。段々に板を並べて作られた見物席を、下から見上げている悪童達。ミランダは、パニック状態に陥って

泣きわめき、ついには子守りのディンシーに伴なわれて家に帰ることになってしまう。幼いミランダのこの恐怖の体験は、その後のミランダにはもちろん、ミランダと非常に近いアイデンティティを持つ人物達、またポーター作品中の他の人物達の多くによって体験されるものである。“Pale Horse, Pale Rider”にあらわれる二人の債券勧誘員に対してミランダが感じた気持は、重苦しい圧迫感から次第に恐怖感に変わって行く。しかもそれは、戦時下という異常な時代がもたらす緊張と抑圧感によって強められ、逃れようにも逃れられぬ程のものとなる。さらに彼女はインフルエンザにとりつかれ、死の恐怖にさらされるのであるが、ここからの必死の逃走——それは病院のベッドの上での、苦しい、浅い眠りの間に見た悪夢の世界から、愛馬グレアリイにまたがって逃走するところに象徴されるのであるが——は、愛人アダムの死という、何物にもかえ難い、高価な代償を要求することになったのである。“The Leaning Tower”では、世界大戦開戦間ぎわの、師走のベルリンが舞台となっている。寒々としたベルリンの街を行く、まるでユニフォームのような、同じようなスキーの服装をした男女、安ホテルの所有者である黄色い顔の不きげんそうな父娘などは、白く顔を塗りつぶし、だぶだぶの道化服を着たサーカスの道化を思い起こさせる。彼らもまた、この物語の主人公 Charles Upton に、何かしら重苦しい、不安感を与えるのである。“Noon Wine”のトムプソン氏もまた、外界に対する恐怖感、不安感に毒された人物の一人である。その結果は、遂に彼は自らの生命を断つことになる。

ポーターの作品中の人物は、単に彼らを取りまく外界に対して恐怖を抱くばかりでなく、己れの内部にある何物かに対しても恐怖を抱く。“Flowering Judas”のローラの恐怖は、己れの無意識の行動が裏切りを働いているのではないかと感じたときに始まる。同じ種類の恐怖は、“Theft”の「彼女」のうちにもある。裏切りを働く己れ自身に対する反発と嫌悪の念、罪の意識、これらすべての恐怖からの逃避の試み

16 Katherine Anne Porter : 逃避への情熱

は、このような人物達をして、すべてを失なわせてしまう。彼らは金も物も、友人も恋人も同志も失なってしまうことになる。“Noon Wine”のトムプソンの場合でさえ、最後に彼自身に向って発砲させた力は己れからの逃避の欲求であり、自己欺瞞に耐えられなくなった彼の取り得た唯一の道であった。裏切り (betrayal) あるいは欺瞞 (deception) が、生涯を通じてポーターの主要な関心事であったということを、ウエスコットは “Katherine Anne Porter Personally” の中で、ポーターと鳥にまつわるエピソードによって述べている。“Flowering Judas” のローラが、ユダの木の花を食べる、という象徴的な行為は、単に彼女の裏切りを象徴するばかりでなく、己れの裏切りに対する彼女自身による断罪をもあらわしている。“Theft” の「彼女」が、かつて失なったもののすべてを、ある執着心をもって再び思い出すことによって、二重に、永遠に失ってしまったこと、それによって己れの罪を (あるいは過失を) きゅう弾しようとしたのと軌を一にしているのである。

幼いミランダのごく日常的な体験の一つに「死」があった。身のまわりによく見かける小さな生き物たち、毛虫や、トカゲや、ひよこはよく死んだ。時には誰かが亡くなった。「ミランダは、動かなくなったり、啼かなくなったり、あるいは元気に生きているもの達とは、どこことなくちがう生き物を見つけると、いつも花と一緒に小さな墓に埋めてやり、その上に滑らかな小石を置いてやるのであった。それが死んだものを取り扱う作法なのであった。」(When Miranda found any creature that didn't move or make a noise or looked somehow different from the live ones, she always buried it in a little grave with flowers on top and a smooth stone at the head. Everything dead had to be treated this way.)⁽⁸⁾

アンクル・ジムビリイは、こうした際に重宝な人であった。彼は子供

達のもとめに応じて、木片で小さな墓碑を刻んでくれるのである。しかし時として、アングル・ジムビリィは子供達の要求を拒絶することがあった。並の大人達とはちがう過去を持つ彼にとって、子供達の無邪気な「お葬式ごっこ」は我慢のならぬことがあったのである。が、彼が「瀆神的な行為」といったことの意味を、ミランダが理解するようになるには、まだ時間がかかるはずであった。「死」とは何であるのかを彼女にはじめて真剣に考えさせたのは、ある夏の、農場行きの直前のできごとであった。死ぬということは、生き物が、単に動かなくなっただけで、生きているものとはちがっていることだけではないのであろうか、とミランダは、ひよこを埋葬したあとで突然聞いた、“weep, weep, weep”という声に驚き、考えこんでしまう。(このあとミランダは農場行きの馬車の中で、止めどなく泣きじゃくるのであるが、その意識の底にあるのは、まだ稚いながら、知らぬ間に重大な過失、小さな生命を持つひよこを裏切ったのではないかという、罪の意識であろう。) この時から、「死」はもはや日常茶飯のできごとではなくなってしまうのである。それは彼女の意識の底深く沈潜し、内側から彼女の生、存在そのものを彫りこみ、形づくって行く。異国のまちのにぎわい、あざやかな色どりと、人混みの喧騒と、生活の匂いの中で、ミランダの心によみがえったのは、彼女が9歳の夏の、掘りかえされた墓穴の湿った土の匂いのする墓地での記憶であった。墓地の腐臭の中で生の神秘にふれたミランダは、今、生の真昼の体臭のうちに死を感じるのである。古い皮を脱ぎすてて、新しい、より大きな生を獲得しながらも“weep, weep, weep”となっていた蛙のように、すべての生の歓喜のうちに悲しみの叫びがある。

ミランダが驚き、眺め、その結果味わうのは常に幻滅である。神話もロマンスも、彼女の目の前で、たちまち色褪せ、古い簞司の底の匂い袋のように、かび臭い匂いをたてるだけになってしまう。絶世の美女の誉

れ高いエイミー。その肖像画は居間の壁に掲げられてあり、人々は想い出に陶醉して彼女をほめそやすのだが、ミランダには、その肖像画の人物が、それほど美しいとは思われない。「しばしば彼等（ミランダとマライア）は、なぜこの絵を見る大人達が、「まあ、きれいだこと」というのかと不思議に思った。そしてなぜ彼女を知る人たちが、誰もかれも、彼女を美しくて、チャーミングだと考えるのかが不思議であった。」(Quite often they wondered why every older person who looked at the picture said “How lovely”; and why everyone who had known her thought her so beautiful and charming.)⁽⁹⁾

エイミーは古い額縁の中で、昔のかなしいロマンスのヒロインでしかない。それでもなお、エイミーのロマンスは、祖母や、父や、大人達の話の中で命脈を保って来てはいたのであったが、ある日、競馬場で会ったガブリエル叔父—彼はエイミーの熱烈な求婚者、愛人であり、エイミー・ロマンスのヒーローであったのだが—によって全くうち壊されてしまう。夢が破壊されてしまったとき、「南部」はもはやミランダを、その魅力によってつなぎとめておくことはできない。ミランダはただ、「閉じこめられた」(immured)と感じるだけである。そして、やがて彼女は、キャサリン・アン・ポーター自身と同じように、修道院学校をとり出してしまう。“The Miranda Stories”には出奔の過程は詳らかにされてはいないが、それ以外の作品の中に出奔の情熱に駆られる主人公達の姿を見ることができる。“The Cracked Looking-Glass”のロザリーンはミランダのような若い娘ではなくて、30歳も年上の夫を持つ中年の人妻なのであるが、彼女もまた現実の生活に幻滅して、出奔を試みる。“Holiday”の「私」も自分自身の抱えている難問からの逃避をはかって旅に出る。「その当時の私には、私を育んだ伝統や、背景や教育やが、抗い難く、逃げ出すのは卑怯者のすることであると教えてくれたのであったが、しかし逃げ出す以外に道はないように思われた。」(It seemed

to me then there was nothing to do but run away from them though all my tradition, back ground, and training had taught me unanswerably that no one except a coward ever runs away from anything.)⁽¹⁰⁾

逃避を試みた人物たちは行先きに決して満足を見いだすことはない。それどころか、彼等が見いだすのはやはり幻滅なのである。

さて、出奔して以来はじめてミランダを故郷に連れもどしたのは、叔父ガブリエルの葬儀であった。帰省の車中で彼女は、何年ぶりかで従姉のエヴァに再会する。口やかましい、気むずかしい老嬢となってしまったエヴァは、エイミーとガブリエルにまつわる「真実の話し」を語ってくれる。それは、無残な中年男となり果てたガブリエルの姿を目のあたりにしたときよりも、もっと大きなショックを彼女に与える。駅頭に出迎えた父の姿。その言葉、その声に、ミランダは昔をとりもどそうとするのであるが、どれ一つとして、彼女の幻滅感を一そう強く深いものとしめないものはない。神話は永遠に消滅してしまった。もしも、それによって己れの生を支え、動機づけてくれるような足場があるとすれば、それは己れの身の上で起こることだけである、と、ミランダは考えるのである。(Let them tell their stories to each other. Let them go on explaining how things happened. I don't care. At least I can know the truth about what happens to me, she assured herself silently, making a promise to herself, in her hopefulness, her ignorance.)⁽¹¹⁾

さて、こうしてキャサリン・アン・ポーター自身が、一度は捨てた故郷、即ち自分自身の過去へと立ちかえるのであるが、この場合にも彼女の行動の支えとなったのは、あらゆる幻滅からの逃避のパッションであった。それは先に引用した、“Noon Wine”; The Sources の中のあ

の言葉が、最も適切にいいあらわしているところであるが、すでに第一の作品集 *Flowering Judas & Other Stories* に収められた作品の中に、幻滅感を読みとることができるのである。“Hacienda”, “That Tree”, “The Martyr” などには明らかに、ポーターがとび込んで行ったメキシコ生活やメキシコの革命運動、革命家に対する幻滅感が濃い。ポーターにはめずらしく、積極的に、高らかに愛を謳歌している作品と考えられている。“Maria Concepcion” においてさえ、マリア・コンセプションのあのモノマニャックな仕事への熱中ぶりに、何がしかの幻滅感を感じとることができる。外から来た災難、己れの境遇に対する幻滅であると同時に、己れの内部にある、自分をつき上げようとする衝動に対する恐れと幻滅感であるように考えられるのである。マリア・コンセプションは決して、無知で原始的なインディアン女ではない。彼女が苦悩に充ちた日々のすべてを費やして捌きつづけた家禽は、彼女が神にささげる犠牲であり、最大のいけにえは、夫を横取りしたマリア・ローザであるのであり、ローザの死は、単なる復讐の犠牲以上の意味合いを持っているのである。(ローザの死を確認した時の、マリア・コンセプションの安堵感を考えてみるがよい)。

逃避のパッションによって動かされている限り、ポーターのとる一步は彼女を前進させない。“The Miranda Stories” の評価は、そのあとにつづく作品によって、よりはっきりするはずであるが、これまでのところ、ポーター唯一の長篇である、*Ship of Fools* 以外には作品は発表されていない。そしてこの長篇は、“The Miranda Stories” の中に見られる、ネガティブな要素をさらに濃くしているだけのように見える。一大叙事詩の形式を取りながら、そこにあるのはただ、ポーター自身がこの世界に対して抱く恐怖と、いらだちと、それらすべてに対するあきらめもしくは絶望の念である。それらはまた、幼いミランダが、その人生への開眼の過程において感じたものと同種のものでもある。それ故

に、この作品にあらわれる人物たちはすべて、救い難いまでに人生に絶望し、悪意に充ち、外界に対する恐怖の念に充ちているのである。いわば、ミランダが小声に発していた不満のつぶやきの拡大であるということが出来るであろう。

さて、“The Miranda Stories”以外にも、極めて自伝的な色彩の濃い作品を数多く書きつづけてきた、キャサリン・アン・ポーターなのではあるが、その伝記的な事実は、ごく最近まで詳らかではなかった。ひとえに、ポーター自身にその責は問われなければならないであろう。また、彼女が折りにふれて話すことばや、書き記すものの中の事実内容の不一致にも彼女の外界に対する態度、一種の防禦の身構え、とでもいい得るものが見られるのである。トムプソンとの話しの中でポーターは、「芸術は天職である」といい、「芸術家としての生涯を送ることは信仰生活と同じことである」という。(Art is a vocation, as much as anything in this world. It is an act of faith.)⁽¹²⁾とすれば、彼女自身が信じていたものが、どの辺りにあったのであろうか。彼女の才能そのものか。その才能を見いだしてくれる彼女を取りまく世界をか。裏切りや欺瞞を生涯の関心事としながら、しかもなお、己れを取りつくろうことに懸命であるように見えるポーターの姿に、この言葉も逆説めいた、皮肉な響きを感じさせるのである。

註

- (1) “Afterword” by Mark Schorer, *Pale Horse, Pale Rider*, A Signet Modern Classic.
- (2) *ibid.*
- (3) William L. Nance : *Katherine Anne Porter & the Art of Rejection*, p. 81
- (4) *The Collected Essays and Occasional Writings of Katherine Anne Porter*, p. 467
- (5) *ibid.*
- (6) George Hendrick : *Katherine Anne Porter*, Twayne's United States

22 Katherine Anne Porter : 逃避への情熱

Authors Series, p. 18

- (7) William L. Nance : *Katherine Anne Porter & the Art of Rejection*, p. 5
- (8) Katherine Anne Porter : "The Fig Tree," *The Leaning Tower & Other Stories*, A Signet Modern Classic, p. 41
- (9) Katherine Anne Porter : "Old Mortality," *Pale Horse, Pale Rider*, A Signet Modern Classic, p. 9
- (10) Katherine Anne Porter : "Holiday," *The Leaning Tower & Other Stories*, A Signet Modern Classic, p. 97
- (11) "Old Mortality," p. 61
- (12) Barbara Thompson : An Interview, *Katherine Anne Porter : A Critical Symposium* p. 11